

大野寿子／福元圭太著 『原書で読む『グリム童話』その語彙と背景』

下藺, りさ
駒澤大学

<https://doi.org/10.15017/7405143>

出版情報：九州ドイツ文学. 39, pp.81-84, 2025-12-26. VEREIN FÜR GERMANISTIK-KYUSHU
バージョン：
権利関係：



大野寿子／福元圭太著

『原書で読む『グリム童話』その語彙と背景』

下 蘭 り さ

「お、これは授業で使いやすそう」というのが本書の第一印象である。独文のない大学でドイツ語を教えている私のような者にとって、グリム童話は非常にありがたい作品である。なんといっても学生が知っている。興味を持って授業を取ってくれやすいというわけで、ドイツ語既修者向けの授業の題材に、何度かグリム童話を扱ったことがある。基本的には訳読をしていくオーソドックスな授業だ。だが、このような場合に毎回迷うことがある。何かというと、既訳の扱いだ。もちろん訳の参考にするのはよいことだし、むしろ積極的にしてほしいとは思っているのだが、どうしても既訳が一種の「正解」として扱われることにもやややしてしまう。しかも最近は生成 AI なるものまで出てきた。レポートすら課題として出しづらいの、ましてや翻訳なんて、という状況になりつつある。そんな授業のやり方次第だろうと言われてしまうと返す言葉もないのだが、やりにくいものはやりにくい。同じような理由で対訳のテキストもやっぱりなんとなく使いづらい。ところが、本書にはこのような悩みを解決してくれる仕掛けが満載なのだ。ここでは本を紹介しつつ本書を使ってどういう授業ができるかを考えてみたいと思う。

1. 作品への導入

本書に収められているのは『白雪姫』や『ラプンツェル』など、グリム童話の中でも有名な7作品。学生にとつきやすいものばかりである。だからこそ、作品を読み始める前にちょっとだけ準備をしたい。まずはタイトルページである。本書では随所に学びを深められるような工夫がなされているのだが、その一つがそれぞれの作品のタイトルである。ドイツ語のタイトルがなんとフラクトゥーア、髭文字で書かれているのだ。というわけで、導入として次の2つができるだろう。

①ドイツ語タイトルをラテン文字に書きかえる

髭文字を見る機会なんてTシャツのロゴくらいのものである。この文字がドイツ語の活字だったことを知らない学生も多いはずだ。ということは、十中八九読めない。けれどもご心配なく。「コラム0」には髭文字の一覧表が載っているので、これを見ながら解説可能である。というわけで、普段使っているラテン文字への書きかえが第一段階。

②物語のあらすじを書く

なぜ？と思われるかもしれない。本書に収録されているのは、ほとんどの学生が内容を知っている作品である。ところが、彼らが知っているのはおそらく絵本やディズニーアニ

メのグリム童話であって、本書が底本としている第7版とは内容が大きく異なっている可能性がある。なので、事前にある程度内容を共有しておいて、グリム兄弟の時代の作品との違いを楽しもうという意図である。

2. 本文を読む

さあ、さっそく読んでいこう！と言いたいところだが、おそらくこのままでは学生はすぐにつまずいてしまう。本文に進む前に、理由説明もかねてまずは一つ目。

①テキストの書きかえ

驚くことに、本書のテキストは現代ドイツ語ではない。1年しかドイツ語を学んでいないのにこんな無茶だろう、と思ってしまうかもしれない。ところがこちらにも手厚いサポートが用意されている。それが語彙のパートだ。通常、こういったテキストの語彙というと、動詞であれば不定形が、名詞であれば1格の形が載っているものだが、本書は本文にある形のまになっている。文法が苦手な学生にもやさしい配慮だ。古い正書法の語もそのままの形で載っており、現代の綴りは補足で説明されている。また、ちょっと難しい文法に関しては、「文法メモ」で詳しく扱われている。なので、このままでももちろん読んでいける。だが、上級者が多いクラスであれば、ヒントなしで現代ドイツ語への書き直しにチャレンジしてみるのも一つの手だろう。

②音読

ドイツ語を理解しているかどうかは、やはり音読をしてもらうとはっきりと分かる。それだけではなく、今回改めて読んでみて思ったのだが、やはり子どもが読むことが想定されているだけあって、『グリム童話』は音が楽しい。『カエルの王様』ではカエルが *plitsch platsch* とやって来るし、『灰かぶり』では小鳥たちが *pik, pik* と手伝いをする。ぜひ声に出して味わいたい。

③訳読

ここで本書最大の特徴を挙げねばならない。なんと、対訳がないのだ。それゆえに、一字一句正確に訳していく必要はない。「正解」に向かって努力する必要がないのだ。『グリム童話』は接続法が多用されていることもあり、文法的な難易度は意外と高い。しかもそこに19世紀のドイツ語でテキストが書かれているという事情も重なる。それならばいっそのこと大意をつかむような読み方をするのもいいだろう。段落ごとに時間や場所、登場人物の情報を拾う、核となるできごとやキーとなる語や文を探す、内容や情景をまとめるなど、いくつかの方法が考えられる。このような読み方をする、既訳があつたとしても、必ず学生自身で読み、考えなければならないというのもポイントが高い。また、場所の理解と一口に言っても、場所の変遷だけを追うこともできるし、文法的に方向・移動を表す語句をおさえるような読み方（コラムには *hin-* と *her-* で始まる動詞が頻出するとあつた）のどちらもできる。文法に重点を置か、それとも内容把握か、学習者のレベルや授業の目的にあわせて柔軟に授業のやり方を変えられるところも本書の利点である。

3. 読後の振り返り

このまま次の作品へ進んでしまってもいいのだが、せっかくなので、振り返りの回をするならばどうするかというのも考えてみたい。

①物語に対して自由に問いを立てて話し合う

よくよく考えると、グリム童話というのはツッコミどころの多い物語である。『カエルの王様』にはタイトルから想像するような王様は出てこないし、挙句の果てにカエルは壁に投げつけられる。なぜそんなタイトルなのか、なぜ(たぶん死んだ)カエルが王子様になって、めでたしめでたしになるのか。「童話だから」で終わらせるのではなく、そんな疑問を拾い上げてクラスで議論してみるのはどうだろうか。その時には、コラムや「雑学メモ」の知識が議論を深める手助けをしてくれるだろう。

②ロールプレイをしてみる

間接話法が多いので、これは少し難しいかもしれない。けれども、会話文を再構成して演じてみるというのは、文法の勉強にもなるし、物語への理解もより深まるに違いない。

③読む前にまとめたあらすじと比較してみる

④現代のテキストと比較してみる

こちらはよく似ているが、③の場合は内容的な変更、④の場合は内容とともに文法的な変更についての考察になるだろうか。余裕があれば、現在出版されているものと比較してみたい。また、本文を読む段階で現代ドイツ語に書き直しをした場合は、それらの文章と現行の版との比較も可能だろう。手近なところでは、Projekt Gutenberg で読める版も本書とはかなり表記が異なっている。どこをどのように変えているのか、そしてなぜ変えたのかを考えてみるといいかもしれない。

⑤挿絵を時系列に並べてみる

これまで触れてこなかったが、本書は挿絵にも力を入れている。ドイツ、イギリスそして日本の19世紀から20世紀にかけて出版されたグリム童話の挿絵が多く載っているのだ。これがまたレトロでかわいい。数も多いので、挿絵だけを抜き出して使えそうである。時系列にそって並べ替えて話の流れをおさらいしたり、絵と一致する文章を探したりと、いろいろなことができそう。同じ場面を描いた絵でもかなり違っており(例えば、ヘンゼルとグレーテルの年齢は絵によってばらつきがあるように見える)、挿絵も解釈の一つの目安と実感できる。

4. 番外編

挿絵について触れたので、もう一つだけ提案を。三つの国の様々な年代の絵が集められているので、同じような場面の絵を並べて、国や時代を推測するというのも面白そうである。『灰かぶり』の服装は時代によってかなり違っているし、『オオカミと七匹の子ヤギ』のヤギの描き方は国ごとの違いが出ているように思う。そこから国や時代ごとの文化の違い

いなどにも話を広げられるだろう。

ここまでいろいろと挙げてきたが、他にもまだ様々なことができそうだ。それもこれも本書の細部にまで行き渡った創意工夫によるところが大きい。作品タイトルの髭文字一つをとっても、第二外国語でドイツ語を学ぶ学生には、未知の文字を読むわくわく感を与えてくれる一方で、独文の学生に対しては、19世紀あるいはそれ以前の文学への橋渡しの役割を担っている。タイトルにある「語彙」の豊富さもだが、「背景」についても、頻繁にさはさまれるコラムや「雑学メモ」でグリム童話の改訂の過程やモチーフの文化的な背景まで知ることができる。本の薄さとは裏腹に、ものすごい情報量である。それにもかかわらず、ページを開いた時の圧迫感みたいなものはまったくない。本書を開くと左のページにテキストが、右のページに語彙が載っているような構成になっており、分量的にちょうどいい。非専門の学生向けの授業から、独文の学生向けの授業まで、幅広く対応できるような作りになっている。

もちろん授業だけでなく、独力で読んでみたいという人も楽しめる。訳が載っていないので、様々なアプローチで自由に、そして何度でも読み直すことができるところが本書の魅力であるし、それが編者のねらいでもあるようだ。九州大学独文学会の会員であるお二人による『原書で読む『グリム童話』 その語彙と背景』。実際に本書を用いて授業をするとうなるだろうか。今から楽しみである。みなさまも、ぜひ。

(語研、2024年)